フィルハーモニア時代のカラヤンを聴く　04.2026 分科会　金古 尚

ヘルベルト・フォン・カラヤンの頂点といえば、それはーーカラヤンのみならず、演奏史というジャンルで考えてみてもーー1970 年代のベルリン・フィルとの録音ということになると思うのだが、その頂点に向かう 1040,50 年代のカラヤンも魅力ある録音を聴かせてくれる。その時のオーケストラはイギリスのフィルハーモニア管弦楽団にあたるのだが、今回はそれらの中のいくつかをご一緒に聞いてみたいと思う。

ヘルベルト・フォン・カラヤン（1908-1989）
20 世紀のクラシック音楽界で最も著名な音楽家の 1 人。「楽団の帝王」と呼ばれる。
ベルリン・フィルの終身芸術監督、ウィーン国立歌劇場の総監督などの主要ポストを歴任した。

フィルハーモニア管弦楽団
EMI のディレクターであるウォルター・レッグにより組織された。最初はレコーディング目的であったが、演奏会も行うようになり 1945 年ビーチャムの指揮で演奏会を行う。1948 年カラヤンが招かれ数多くの録音を行った。カラヤンがベルリン・フィルの終身指揮者になり、関係は疎遠となる。

モーツァルト：セレナード「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」
4’02- 6’12- 2’15- 2’52　　Aufnahme 1951.11.18　ロンドン、EMI 第 1 スタジオ

カラヤンには同じ曲を複数回録音したものも多いが、これもその 1 つ。5 種類の録音が残されている。爽やかで幾分上品な感覚がする。後になると幾分重い演奏に聞こえる。
曲は 1787 年、ウィーンで書かれる。ちょうど「ドン・ジョヴァンニ」作曲の頃にあたる。弦楽合奏で演奏されるよく知られた名品である。

モーツァルト：ホルン協奏曲第 1 番ニ長調　　4’34- 3’36
デニス・ブレイン（Hrn）　　1953.11.12 キングスウェイ・ホール

デニス・ブレイン(1921-1957)はイギリスのホルン奏者。フィルハーモニア管弦楽団とロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団の首席奏者として活躍した。
モーツァルトは 4 つのホルン協奏曲を残しているが、第 1 番はニ長調の 2 楽章で書かれている。優雅な雰囲気を持つ。

ベートーヴェン：交響曲第 6 番から第 1 楽章

9’22　1953.7.6 キングズウェイ・ホール

カラヤンはベートーヴェンの交響曲全曲を 4 回（映像を除く）録音している。レパートリーの広さより同じ曲を複数録音していることはカラヤンの音楽観を考える上で大切な部分であると思う。曲は当時としては異例の 5 楽章でかかれ、初演のパート譜に「絵画描写よりも感情の表出」と自身で書いている。

R.シュトラウス：最後の 4 つの歌
エリザベート・シュヴァルツコップ　2’57- 5’00- 6’44- 3’44
1956.6.20 ロイヤル・フェスティヴァル・ホール（ライヴ）

1948 年に書かれたソプラノと管弦楽のための歌曲集。「春」「9 月」「眠りにつく時」「夕映の中で」の 4 曲からなる。独唱のシュヴァルツコップ(1915-2006)はオペラや歌曲の優れた演奏者であった。今回は「春」「眠るとき」「夕映の中に」「9 月」の順になっている。

ワルトトイフェル：スケートをする人々
マスカーニ：歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」より間奏曲
1953.7 キングズウェイ・ホール

LP への切り替えが進んだ時期、長時間録音できることを活かして親しみやすい小品を次々に発表した。それらでもカラヤンはきっちりと聴かせ上手な演奏を残している。

チャイコフスキー：交響曲第 6 番ロ短調　19’10- 8’23- 9’09- 9’34
1955.5.27 キングズウェイ・ホール

カラヤンはこの曲を 7 回録音している。今回聞くのは 3 回目のもの。カラヤンはこの曲が好きだったのだと思う。「歌」があり、聴かせどころもある作品である。
この曲はチャイコフスキー最後の大作。作曲者は曲については「人生について」としか語っていない。彼はこの曲の初演後 9 日後コレラのために急死している。

今回、フィルハーモニア管弦楽団時代のカラヤンを改めて聞き直してみました。この人は自分の演奏を聴く人のために何が最良なのかを常に考えていた人だと思います。この人の指揮したオペラを取り出してきくと磨かれた美しさ、雄弁さに圧倒されます。やはり 1 つの時代が終わったのだと思います。